

神奈川県立金沢養護学校



# 学校だより

第30号 平成21年9月30日

## キャリア教育 (1)

副校長 渡邊昭宏

キャリア教育という言葉が、高校だけでなく小学校・中学校でも使われだして、もう何年もたちます。「職場体験」「仕事にチャレンジ」「インターンシップ」などというイベントばかりが先行して、進路指導と何が違うの？ お仕事を選ぶための勉強？ 就職できるようにする教育？ 進学する人には関係ないの？ 養護学校は改めてしなくていいの？ といった本人や保護者からの素朴な疑問に答えられない先生方が増えてきました。

もともとは、進学もせず仕事もしないいわゆるニートという若者の増加に危機感を抱いた経済界が、文部科学省に対し、小学校段階からしっかりと将来を意識させ、立派な社会人（職業人）になれるよう系統的に教育することが必要だと説いたのが始まりです。

私たちが中学生・高校生だった頃のことを思い出してみてください。確かに進路（進学）指導ということが行われていたと思いますが、卒業学年になるころから急に始まり、就職先や進学先を紹介されて、成績によって何となく（または強引に）当てはめられたといった記憶がありませんか。つまりそこには、なぜその職種（学部学科）がふさわしいのか、進学先を卒業後はどうするのか、希望をかなえるために何をしておかなければならないのか、つまりいたらどうするのか、といったことを自分でじっくり考える時間も与えられず、ただレールの上を走らされて、社会に放り出されたといった感じがしませんか。

養護学校だって例外ではありません。現実的に入れそうな進路先（会社・施設・作業所）が先にあり、そこからOKがもらえるまで何度も実習に行かせて卒業させるといった**進路指導**が長年行われてきました。**自己選択・自己決定、措置から契約へ**などと叫ばれる時代になっても、複数の進路候補先から自分の意思で選べた人が実際どれだけいたでしょう。学校側の勝手な事情では、高校もそうですが「せっかくOK（推薦枠）をもらっているのに断ってはあとに響くので誰かを行かせる」「この実力（偏差値）ならここ」と決めるのが最も楽だからです。本当にその進路先（進学先）が本人にとってふさわしいのか、本当にその仕事（学部学科）が好きなのか、本当にその進路先（進学先）でやっていけるだけの力をこれまで身につけてきていただろうか、といった本人の立場にたった進路選択・進路決定（これが**進路支援**です）がされてこなかったことは紛れもない事実です。

不況だし、社会資源は限られているし、それを許すような社会体制が整っていないのだから、そんな理想論を言ったって始まらないと開き直られるのも確かにわかります。でもたとえ同じ結果（進路先）になっても、それまでに親子で、どれだけの体験や準備を小さい頃より積み重ねてきたか、どれだけ悩んで結論を出すに至ったかといった、**経験や経過**こそが、その後の長い人生を豊かにしていける原動力になると確信しています。

実はそれこそが、これからお話ししたい**キャリア教育**なのです。（次回につづく）